

生徒が主体的に参加できる中学校音楽科の授業づくり

—「鑑賞」の授業における生徒の多様な「聴く姿」に注目して—

教職実践専攻・教科領域実践コース
学籍番号 21GP302 氏名 島津 杏佳

1 はじめに

これまで筆者が受けてきた音楽科の授業を振り返ると、特に「鑑賞」の授業は他の活動と比べ、音や音楽を児童生徒自ら聴くことを通して知覚・感受する時間が少なくなってしまうやすいことや、児童生徒の参加が受動的になりやすい傾向があることを実感してきた。

また、これまでの「鑑賞」の授業において教師は、生徒が音や音楽を聴いて知覚・感受したことの一部である言語化された表現を主な学びの姿として捉えることが多かった。しかし、個人差の生じやすい言語表現のみでは、生徒の学びの姿を十分に捉えきれない可能性がある。

音楽科の授業は、生徒が多様な音や音楽と出会い、個々の様々な経験と結び付けながらイメージを持ち、新たな発見を得ることができる機会である。新たな発見を得た生徒が自分なりの興味・関心を持つためには、生徒自ら進んで授業に参加する意欲が必要であり、教師による授業の手立てや工夫が必要である。

以上のことを踏まえ、本研究では、「多様な音や音楽を、個々の様々な経験と関連付け、想像力を膨らませながら自分なりの興味・関心を持って聴くことを通して、音楽的な特徴等を捉え、音や音楽に対する価値を自分なりに見い出そうとする生徒」の育成を目指す。

2 研究概要

(1) 音楽科における「主体的な学び」について

「主体的な学び」についての授業改善の視点として、中央教育審議会答申（2016）には、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」ことを挙げ、「子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である」と明記されている。¹⁾

また、中学校学習指導要領解説音楽編（2019）では、鑑賞領域における「思考力、判断力、表現力等」に関する資質・能力として、「曲や演奏に対する評価とその根拠について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにすること」「生活や社会にける音楽の意味や役割について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにすること」「音楽表現の共通性や固有性について自分なりに考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにすること」を挙げている。²⁾

これらに共通する行為が、音や音楽を「聴く」ことであることから、この行為は音楽科の「鑑賞」の授業において特に注目すべき行為であると言える。

濱本（2018）は、「主体的な学び」が実現した子どもの具体的な姿を、

①鑑賞活動に対する興味や関心を高める（課題発見）

②音楽のよさや美しさを見いだす見通しをもつ

③対象となる音楽に自分の意識を向けて聴き、音楽によって喚起されるイメージや感情を自覚する

④学習したことを振り返って、学んだことや自分への影響を自覚し、次の学びへつなげる

の4つに整理している。³⁾

これらを踏まえ、本実践研究では主体的な「学びの姿」を以下のように整理する。

- ①これまでの生徒自身の経験から、多様な音や音楽に対する興味・関心を見つけることができる。
- ②多様な音や音楽によって喚起される自由なイメージや感情等を自覚することができる。
- ③自覚したイメージや感情等を自分なりの方法で表現することができる。
- ④イメージや感情等を、音の素材や音楽の構造等の音楽的な知識と関連付けることができる。
- ⑤学習活動を通して、多様な音や音楽に対する価値を自分なりに見い出すことができる。

（２）生徒の多様な「聴く姿」について

山田（2017）は、思想家のM. セールらの主張を踏まえながら、「音を聴くことも感じることも、決して受動的な行為ではない」とし、『「聴くこと」』は、つねに音を感知する全方位性のアンテナとしての『感じる身体』と直結している」と述べている。⁴⁾

音や音楽を「聴く」行為を通して何らかのイメージを持つことは、同じ音や音楽を聴いた時、ある人の「きれい」ともう一人の「きれい」が完全に同じことを意味しないこと等から、個人の内面で起こる主体的な行為であると言える。さらに、ある音や音楽を「きれい」と感じている姿について、「音楽に合わせて身体を揺らしながら聴く姿」や「じっとして聴く姿」等、個人によって異なった「聴く姿」も主体的な行為であることを意味していると言える。

これまでの「鑑賞」の授業において教師は、生徒が音や音楽を聴くという行為を終えた後、知覚・感受したことを主に文字や言葉として表現されたものを学びの姿として捉えている傾向があり、生徒の学びの姿を十分に捉えきれていない可能性がある。しかし、生徒に言語化しきれない心の動きがあるとすれば、生徒が音や音楽を聴いているその姿に注目することが必要である。

これらを踏まえ、本実践研究における生徒の多様な「聴く姿」を「生徒一人一人の特性や経験等によって異なる、個人が音や音楽に対して向き合う姿」であり、例えば、目を閉じながら聴く姿や聴こえた楽器を演奏するように聴く姿、リズムを身体で合わせるようにしながら聴く姿等とする。

本実践研究では、教師が生徒の多様な「聴く姿」等に注目することで、より幅広い生徒の主体的な学びの姿を捉えていく。また、生徒の多様な「聴く姿」等に注目する働きかけにより教師が生徒の考え等をさらに引き出すことを可能とし、生徒の学習意欲を高めていく。また、生徒が各時間の終末に学びを振り返る場面を設定することで、生徒自身がどのように作品等と向き合うことができたのかについて自覚することができるようにする。

（３）研究仮説

前記のことを踏まえ、本実践研究では、前述した生徒の姿を目指す最終的な生徒の姿とし、以下の仮説を設定する。

「鑑賞」の授業において生徒の多様な「聴く姿」に注目し、生徒の興味・関心を引き出す働きかけや評価の方法を工夫すること等で、生徒が主体的に音楽科の授業に参加することができるのではないか。

- ① 多様な音や音楽を聴くことを通して知覚・感受する時間を確保するとともに、生徒が鑑賞等の活動に意欲を持てる発問の工夫をすることや、生徒への情報の与え方を工夫すること等で、生徒の興味・関心を引き出し、生徒はより主体的に「鑑賞」の授業に参加することができるのではないか。
- ② 生徒の多様な「聴く姿」を明らかにした上で、生徒の言語的な表現だけではなく、身体的な表現等にも注目して生徒の考えを引き出すことで、生徒は学習意欲を高め、理解を深めながら、より主体的に「鑑賞」の授業に参加することができるのではないか。

- ③ 生徒自身が本時の学びを振り返る場面を設定することで、生徒は作品を鑑賞して知覚・感受したことを自覚することができ、主体的に「鑑賞」の授業に参加することができるのではないかな。
- ④ 教材に合わせて適切な教育機器を効果的に活用することで、生徒はより主体的に「鑑賞」の授業に参加することができるのではないかな。
- ⑤ 小学校での既習事項や、前学年・前単元までの既習事項を必要に応じて関連付けることで、生徒はより主体的に「鑑賞」の授業に参加することができるのではないかな。

3 今年度の授業実践

3-1 「トロンボーンの魅力を見つけよう」の授業実践

(1) 実践の概要

筆者は、令和4年5月に、A中学校第1学年B学級29名を対象に以下の授業を行った。

- ① 題材名 トロンボーンの魅力を見つけよう（1時間扱）
- ② 目 標 トロンボーンやサクソバットの音色を楽しみ、その歴史や特徴を知ること、自分なりに楽器の魅力を見つけ、他者に伝える。
- ③ 指導の工夫

- 1) 生徒の多様な「聴く姿」に注目することで、生徒一人一人がどのように作品を鑑賞しようとしているのかについて多面的に捉え、生徒の考えを深める言葉がけをすることで、生徒は主体的に授業へ参加することができるのではないかな。
- 2) 生徒に具体的な学習課題を提示することで、生徒は活動に進んで取り組むことができるのではないかな。
- 3) 生徒が実際に楽器を見たり音色を聴いたりする場面を設定することで、生徒はより自分なりの興味・関心を持って楽器の特徴等を捉えることができるのではないかな。
- 4) 小学校での既習事項を必要に応じて関連付けることで、生徒はより主体的に「鑑賞」の授業へ参加することができるのではないかな。

④授業概要

本授業は、筆者が本研究の対象とする生徒に初めて行う「鑑賞」の授業である。本時の冒頭では、学習課題を伏せ、教師が生徒らに楽器が見えないようにトロンボーンを演奏した。生徒らは、演奏された音に対して①素材②楽器の大きさ③どのような音かについて予想し、発表した。次に、教師が楽器の紹介と学習課題「トロンボーンの魅力を紹介しよう！」を提示した。その後、サクソバットとトロンボーンを実際に観察した後に、演奏映像を鑑賞し、気付いたこと等を発表した。最後に、トロンボーンの魅力についてワークシートにまとめ、発表した。

(2) 実践の省察

本時では、今後の実践でさらに生徒の多様な「聴く姿」等に注目していくために、授業冒頭で楽器の音について3つの観点で予想しながら聴く場面を設定した。ここでは、生徒の多様な「聴く姿」等に注目することを主な省察の視点とする。

表1 楽器の音色を聴いた後の生徒の予想（抜粋）

①楽器の素材	②楽器の大きさ	③どんな音か
<ul style="list-style-type: none"> ・金属（つばい） ・金管楽器 ・トロンボーン/ホルン 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きい ・1メートル以上 ・机くらい 	<ul style="list-style-type: none"> ・低い/重い ・ゾウの鳴き声 ・ブー/ブオー/ボーン

表1は、本時の冒頭で楽器の音色を聴き、3つの観点について予想した場面のワークシートの記述を抜粋したものである。生徒らは、①楽器の素材について、生徒全員が「金属」系の音であることを予想する等、3つの観点全てから個々のこれまでの生活体験を生かして記述していることが分かった。さらに、発表場面においても、楽器の大きさについて「大きい」と発表する生徒が多く見られたが、「どれくらい大きいのか」について追加発問を行うと、生徒は自身の手を使って表現していた。以上のことから、教師が積極的に「生徒の聴く姿」に注目したり、言葉の表現のみに偏らない場面を取り入れたりすることは、必要に応じて追加発問を行うことが可能となり、生徒の考

えをさらに深めることにつながる有効な手立てであると考ええる。

3-2 「音楽とイメージ、表現の多様性『魔王（Erlkönig）』」の授業実践

（1）実践の概要

筆者は、令和4年9月に、A中学校第1学年B学級24名を対象に以下の授業を行った。

①題材名 音楽とイメージ、表現の多様性「魔王（Erlkönig）」（3時間扱）

②目 標

第1時 シューベルト作曲「魔王」を鑑賞し、ドイツ語の詩と音楽との関わりや、登場人物の様子と伴奏等に注目することで、その変化について捉え、作品に対するイメージを膨らませる。

第2時 シューベルト作曲「魔王」を鑑賞し、第1時で見つけた作品の特徴や音楽の変化等を、楽譜に注目すること等を通して、作曲者の音楽表現の工夫について捉える。

第3時 他の作曲者の「魔王」を比較聴取することを通して、表現の多様性を味わうとともに、詩と音楽との関わりや、登場人物の様子と伴奏の変化から作品の魅力を捉える。

③指導の工夫

- 1) 作品に関する情報の伝え方を工夫することで、生徒は作品そのものに対する関心を高めることができるのではないか。
- 2) 生徒の多様な「聴く姿」や身体的な表現等に注目することで、より幅広い視点で生徒の主体的な学びの姿を捉えることができるのではないか。
- 3) 生徒に具体的な学習課題を提示することで、生徒は主体的に活動に取り組むことができるのではないか。
- 4) 音源を繰り返し聴く場面を設定することで、生徒は作曲者の工夫を探るとともに、理解を深めることができるのではないか。
- 5) 教育機器を効果的に活用することで、生徒は活動意欲を高めることができるのではないか。
- 6) 生徒が音源を聴く際、各場面の登場人物の情報を提示することで、生徒は作品の各場面を具体的に把握しながら、進んで鑑賞することができるのではないか。
- 7) 生徒が十分に音源を聴いたり、考えたりする時間を確保することで、生徒は主体的に活動に取り組むことができるのではないか。

④授業概要

第1時では、「魔王」の音源を聴くことを通して自由に想像した曲のイメージや、知覚・感受したことを発表した。その後、「作品の特徴や音楽の変化を見つけよう!」という学習課題を提示し、登場人物とドイツ語の詩の内容について、筆者が作成した相関図をもとに大まかに把握した。次に、登場人物である「子」、「父」、「魔王」の場面とピアノ伴奏に注目し、音楽を聴き比べた。最後に、音楽の変化や各場面、伴奏の特徴等についてイメージを膨らませながら発表した。

第2時では、前時の復習を行った後に、なぜ音楽を聴いただけでたくさんのイメージを膨らませることができたのかについて考えた。その後、「作品にしかけられた作曲者の工夫を探ろう!」という学習課題を提示し、授業を進めた。その上で、音楽を聴き比べる際に楽譜を読み比べたりしながら、作曲者の工夫を教師と共に探った。

第3時では、始めに日本語訳字幕付きのDVDを鑑賞し、第2時までの復習を行った。その後、「いろいろな『魔王』を聴き比べよう!」という学習課題を提示し、異なる作曲者2名による「魔王」を聴き比べ、各作品を聴いて知覚・感受したことを、自由に発表し合った。最後に、3つの「魔王」から1つを選択し、生徒自身が選んだ作品について、選んだ理由と合わせて、紹介文を作成・発表した。

各時間の終末に、授業を通して考えたこと等についてワークシートを用いて振り返りを行った。

（2）実践の省察

本実践では、前述した実践の成果と課題を踏まえ、授業中やその後のビデオ分析によって確認された生徒の「聴く姿」やその他の様子、生徒のワークシートの記述から全3時間の省察をしていく。

①第1時について

次頁の表2は、第1時で確認された「聴く姿」や様子を抜粋したものである。生徒Aは、聴こえてくる音からどのような楽器で演奏されているのかについて知覚し、生徒Bは弾むように身体を動かし、他の場面とは異なるリズムや場面の雰囲気を感じ取っている。そして、生徒Cは

「魔王」の場面での気付きとして「余裕そう」と発言した。教師が発言の意味を問うと、「余裕そう」な様子を具体的に表そうと、両手を軽く挙げて身体全体を上下させるような動作で答えた。それを見た他の生徒は、微笑んだり、うなずいたりしている。このことから、生徒Cは言葉を補う手段として自然に動作を交えて発表したと考える。また、他の生徒らにも生徒Cの思い浮かべた「余裕そう」な様子が伝わり、考えたイメージを共有することにつながっている。以上のことから、教師が生徒の「聴く姿」等に注目することで、生徒自身の考えやイメージを引き出し、生徒がより作品に対する興味・関心を深めることができたと考える。

表2 第1時で確認された「聴く姿」や様子（抜粋）

(生徒A) 作品全体の音源を聴く場面で、ピアノを演奏するような動きをしながら聴く姿
(生徒B) 「魔王」の登場部分を聴く場面で、身体を揺らしながら聴く姿
(生徒C) 「魔王」の登場部分の雰囲気について発表する場面で、言葉だけでなく自分なりに動作を交えて伝えている様子

表3 第1時のワークシートの記述（抜粋）

作品全体の雰囲気	子ども	父	魔王	伴奏
・怖い ・戦っている ・ディズニー	・おびえている感じ ・どんどん高くなる ・必死な感じ	・落ち着いている ・全体的に静か ・焦り始めている？	・優しい感じ ・余裕そう ・最後怒っていそう	・人が変わると雰囲気が変わる ・ダダダダダダッダー

表3は、第1時の作品全体の雰囲気や、各登場人物、イメージ等の記述を抜粋したものである。生徒の記述から、作品名や大まかな詩の概要を知る前は「怖い」等というイメージを持っている。また、「戦っている」「ディズニー」等という記述から、トロンボーンの授業の省察と同様に個々の生活体験と結び付けて作品に対するイメージを自由に膨らませていることが分かる。さらに、各登場人物についての生徒らの記述では、大まかに把握した詩の概要をもとに、各場面の変化や、登場人物の違いによる特徴が分かる記述が見られていることから、生徒は自分なりの視点を持って主体的に比較聴取していると考えられる。

②第2時について

表4 第2時で確認された「聴く姿」や様子（抜粋）

(生徒D) 作品全体を聴く場面で、スクリーンに提示された登場人物とドイツ語の詩を注視しながら聴く姿
(生徒E) 登場人物や部分ごとに聴く場面で、スクリーンに提示された楽譜に注目しながら聴く姿
(生徒F) 作曲者の工夫を調べる方法について考える場面で、「楽譜」から読み取れる情報について既習事項を生かして発言する様子

表4は、第2時で確認された「聴く姿」や様子について抜粋したものである。生徒D及びEは、スクリーンに提示された登場人物について、その場面の移り変わりを捉えようとしている。また、聴いている音楽がどのように楽譜に表されているのかについて注目している。さらに、生徒Fは、注目すべき楽譜の情報について、これまでの知識を活用しながら、作曲者の工夫について探っている。以上のことから、生徒の「聴く姿」等に注目することで、生徒の主体的な学びの姿を捉えることができたと考えられる。

表5 第2時のワークシートの記述（抜粋）

(生徒G) 雰囲気を、音の高低、強弱、テンポで表現しているのが分かった。
(生徒H) 強弱記号（を）で、こわさを表している。
(生徒I) 伴奏の3連符が印象に残った。速いテンポで馬を表現していることで、それぞれの登場人物の心情が分かった。

表5は、第2時のワークシートの自分なりに見つけた作曲者の工夫についての記述を抜粋したものである。生徒G及びHは、作曲者の登場人物ごとの工夫について、音の高さ等に注目しながら変化を聴き比べたことを自分なりにまとめて記述している。また、生徒Iは、「3連符」という用語を記述しているが、第1時ではこれを「ダダダダダダッダー」としており、学習で得た知識を積極的に活用している。

以上のことから、生徒は第1時で作品全体や各登場人物等の音楽に対する自分なりの気付きや作品に対するイメージを踏まえ、そのことがどのように作曲者の工夫として作品に表れているかについて、興味・関心を持って探ることができたと考えられる。

③第3時について

次頁の表6は、第3時で確認された「聴く姿」や様子について抜粋したものである。

表 6 第 3 時で確認された「聴く姿」や様子（抜粋）

（生徒 J）	日本語訳字幕付きの DVD を鑑賞する場面で、スクリーンを注視しながら聴く姿
（生徒 K）	日本語訳字幕付きの DVD を鑑賞し終えた瞬間に、最後の結末を知り、物語の展開に驚く様子

生徒 J は、これまでは分からなかった詩の詳しい内容について知ろうと、関心をもって聴いている。また、生徒 K は、第 2 時までの学習で大まかな詩の概要と音楽から、作品全体の雰囲気や各登場人物の状況をイメージしたり、楽譜に注目しながら作曲者の工夫について考えたりしたことを照らし合わせて鑑賞している。

これらのことから、第 3 時の冒頭で日本語訳字幕付きの DVD を鑑賞するまで、具体的な詩の内容についての情報を伏せるという工夫が、生徒の想像力を高め、作品に対する興味・関心を持続させながら授業に積極的に参加することにつながったと考える。

表 7 第 3 時のワークシート「紹介文」（抜粋）

シューベルト	（生徒 L）この曲は独特な音調で魔王という題名がふさわしいです。だから、低音で怖いです。同じところが繰り返されるところのピアノの音がくせになります。馬の足音を 3 連符で表されているところがこの作品のいいところだと思う。
レーヴェ	（生徒 M）レーヴェの作品は、流れるような感じではなく怖い雰囲気や音の大きさ、高さが上がったたり下がったりすごくていいと思った。強く歌うところが激しく、穏やかなところとのギャップがすごかった。
ツェルター	（生徒 N）明るく落ち着いている感じで、他の魔王に比べて怖さとかが伝わってきづらい。だけど最後の方になると、子どもの怖がっている様子や魔王が無理やり連れていこうとしている様子が音の大きさや速さで表されていた。

表 7 は、第 3 時の終末に生徒が書いた「紹介文」を抜粋したものである。これらの記述から、生徒は自分なりに作品に対する興味・関心を持って、3 つの作品から 1 つを選び、これまでに学習した音の高低に関する知識やリズム等、音楽を聴く際に注目した視点を活用して紹介文の作成に取り組んでいる。また、表 5 の生徒の様子を踏まえると、作品を聴く際に登場人物をスクリーンに提示したことで、生徒は場面の移り変わりを意識しながら音楽が変化していく瞬間を捉えることが可能となり、第 3 時で初めて聴いた作品に対しても自分なりにそれぞれのよさや魅力を見つけることができたと考える。

④全 3 時間を通して

表 8 各時間の振り返り（抜粋）

	第 1 時	第 2 時	第 3 時
（生徒 O）	他の人の意見も聞いて新しく気付いたこともあったので、この曲の意味が知れてよかったです。	音や速さの違いに気を付けながら聴いてみると、なぜこんな印象を感じるのかがわかってこの曲の意味についてまた少し理解できた感じがしました。	音だけでなく歌詞も見ると雰囲気がもっと出るなと思いました。同じ詩なのに、音程が違うだけでこんな雰囲気が変わるんだと思いました。
（生徒 P）	ピアノや声だけでも聴いている人にイメージさせるような感じでおもしろくていいと思った。	1 時間目と比べて、いろんな所に注目しながら聴くと、登場人物の変化などに気が付いた。	3 時間目で日本語に訳した歌を聴いたけど、自分の思っていることとはまったく違い衝撃的な部分があってビックリした。

表 8 は、第 1 時から第 3 時の振り返りについて、同一生徒の記述を抜粋したものである。生徒は、特に第 1 時から第 2 時で「聴く」視点がより焦点化されている等、各時間の学習で得た情報を生かしながら、自分なりの興味・関心を持って授業に参加していた。

以上のことから生徒は、3 時間の学習を通して新たな発見を得て作品に対する理解を深め、それを自覚することができたと考える。

3-3 「春」の授業実践

（1）実践の概要

筆者は、令和 4 年 11 月～12 月に、A 中学校第 1 学年 B 学級 28 名を対象に以下の授業を行った。

① 題材名 ヴィヴァルディ作曲「春」（2 時間扱）

② 目 標

第 1 時 弦楽器やチェンバロの音色を味わいながら、各楽器の特徴等を捉える。

第2時 ソネットの情景をイメージし、音楽との関わりを考えながら「春」を鑑賞する。

③ 指導の工夫

- 1) 生徒の多様な「聴く姿」に注目することで、生徒一人一人がどのように作品を鑑賞しようとしているのかについて多面的に捉え、生徒の考えを深める言葉がけをすることで、生徒は主体的に授業へ参加することができるのではないか。
- 2) 生徒に具体的な学習課題を提示することで、生徒は活動に進んで取り組むことができるのではないか。
- 3) 生徒が実際に楽器を見たり、触れたり、音色を聴いたりする場面を設定することで、生徒はより自分なりに興味・関心を持って楽器の特徴等を捉えることができるのではないか。
- 4) 生徒が授業を通して気付いたことや考えたこと等を振り返る場面を設定することで、生徒は知覚・感受したことをより自覚して授業へ参加することができるのではないか。
- 5) 教育機器を効果的に活用することで、生徒は意欲を持って授業へ参加することができるのではないか。
- 6) 小学校での既習事項や、前単元までの既習事項を必要に応じて関連付けることで、生徒はより主体的に「鑑賞」の授業へ参加することができるのではないか。
- 7) 生徒が自分なりの方法で作品の特徴や魅力を紹介する場面を設定することで、生徒は作品に対する魅力等を幅広い視点で他者に伝えることができるのではないか。

④ 授業概要

第1時では、「いろいろな楽器の音色を聴いて、楽器の特徴を見つけよう！」という学習課題を設定し、授業を進めた。始めに、生徒らに楽器が見えないように本時で鑑賞する一部の楽器を教師が演奏した。生徒らは、演奏されている音色について楽器や素材等を予想しながら聴き、発表した。次に、楽器の紹介と学習課題を提示した後、生徒全員がヴァイオリンを演奏する体験活動を行った。その後、各楽器の音色について演奏映像を見て鑑賞した。次に、チェンバロの音色とピアノとの特徴の違いについて演奏映像を見ながら鑑賞した。生徒らは随時、気付いたことや捉えた特徴等を必要に応じてワークシートにまとめた。その後、作品名等の情報を伏せた状態で「春」の演奏映像を鑑賞し、作品の雰囲気等の気付きをワークシートにまとめた。最後に、本時の振り返りを行った。

第2時では、始めに前時の復習を行い、学習課題「『春』の特徴や魅力を紹介しよう！」を提示した。次に、教師が「ソネット」をはじめとする作品に関する情報について補説した。そして、生徒は「ソネット」の情景をイメージしながら場面ごとに音源を鑑賞し、気付いたことや楽譜を見て気付いたこと等をワークシートにまとめ、発表した。その後、「春」の演奏映像を鑑賞し、作品の紹介に向けてワークシートをまとめ、発表した。最後に、前時を含む振り返りを行った。

(2) 実践の省察

① 第1時について

表9 楽器を鑑賞する生徒の様子（抜粋）

- | |
|---|
| (生徒Q) 自分の予想していた重さと異なり「意外に軽いなあ」とつぶやきながら楽器を手に取り鑑賞する様子 |
| (生徒R) 他者と楽器の特徴を確認し合いながら楽器を手に取り鑑賞する様子 |
| (生徒S) ヴァイオリンの持ち方に苦戦しながらも、音を鳴らせたことに喜ぶ様子 |

表9は、第1時で楽器を鑑賞し、ヴァイオリンの演奏を体験する活動での生徒の様子を抜粋したものである。生徒Q及び生徒Rの様子は、本物の楽器に触れることのできる場面を設定したことによって捉えることができた。楽器を見た時に知覚・感受したことを、実際に楽器に触れることを通して考えを深めていることが分かる。さらに、他者の考えを共有し合うことができ、楽器の特徴について捉えることができていることが分かる。ヴァイオリンの演奏を体験している場面での生徒Sの様子からは、楽器を演奏することの難しさを実感しながらも、音を鳴らすことができた喜びを生徒自身が自覚しながら体験していることが分かる。この場面では学級全体の生徒らの様子から、一人一人が進んで楽器に触れようとしていることが確認できた。

② 第2時について

次頁の図1は、生徒がワークシートに記載した『春』の紹介を抜粋したものである。本時の作品紹介では、表現方法を文章に限定せず、生徒が選択できるようにした。生徒Tは、場面ごとに音源を聴く場面の気付きを中心として作品全体の特徴や使用楽器を紹介してい

る。また、生徒Uは、ソネットの情景を場面ごとに自分なりに絵で表現し、それを補足する形で場面の特徴や作品に対する魅力を紹介している。このように、自ら表現方法を選択し、2時間の学習を通して得た作品の特徴や魅力を自分なりに紹介することができたことから、作品の紹介方法について生徒が選択できる場面を設定したことは、生徒が知覚・感受したことを自分なりに表現するに当たって有効な手立てであったと考える。

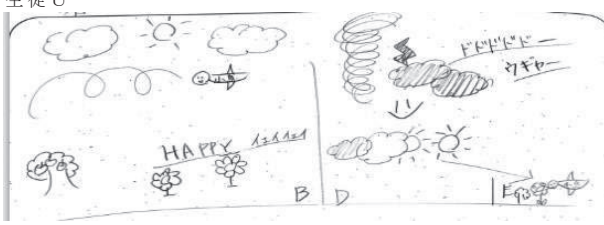
<p>生徒 T</p> <ul style="list-style-type: none"> - A-「春がやって来た」の部分 <ul style="list-style-type: none"> ・音の大きさが変わっている ・高い音が多い - B-「小鳥は楽しい歌で、春を歓迎する」の部分 <ul style="list-style-type: none"> ・スタッカートがある ・トリル - C-「泉はそよ風に誘われ、ささやき流れていく」の部分 <ul style="list-style-type: none"> ・ゆらゆらしている感じ ・スラーがある（なめらか） - D-「黒雲と稲妻が空を走り、雷鳴は春が来たことを告げる」の部分 <ul style="list-style-type: none"> ・魔王見たい ・春が来た感じ - E-「風がやむと、小鳥はまた歌い始める」の部分 <ul style="list-style-type: none"> ・Bのときはちがう小鳥の鳴き方 ・半音ずつ上がっている ・風がやむ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>春を想像することが出来る。A～Eの語にも合っている。いろんな記号をつかって工夫している。天気が悪くなっている所は、音が低くなっていたり、小鳥が踊っている所は音が高くなったりしている</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>一楽器一ヴァイオリン ヴァイオリン チェロ コントラバス チェンバロ</p> </div>	<p>生徒 U</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・Bは高い音が多く小鳥がとてもいい気持ちになっています。そしてじょじょに天気や情景が変わり、それに合わせて曲のふんいきも変わっています。 ・頭の中でストーリーが生まれる。
--	---

図 1 生徒が作成した『春』の紹介（抜粋）

③全2時間を通して

表 10 各時間の振り返り（抜粋）

	第 1 時	第 2 時
（生徒 V）	名前は知っているけど、どういう楽器かわからない楽器がたくさんあったけど、それぞれの楽器の特徴を生かして、全部の楽器で演奏すると、明るい感じが少しこわい感じなどが表現できるからびっくりした！！	この曲は聴いたことがあって、春を表現していることがとてもわかりやすかった。紹介するところも曲の特徴やいいところがいっぱいあったので紹介しやすかった！！
（生徒 W）	一つ一つ、手でその曲を表現できると知り、音の大きさや小ささだけでなく体全体で表現していて、いい勉強になりました。	5つの楽器には、一つ一ついいところがあって、それが合わさっていい曲になったと思います。聴いてるだけで春風が吹いているように感じられる曲でした。

表 10 は、第 1 時から第 2 時の振り返りについて、同一生徒の記述を抜粋したものである。生徒 V 及び生徒 W の記述から、第 1 時でこれまで分からなかった楽器の特徴を新たに捉え、各楽器の音色が重なることで初めて感じられる気付きが見られる。さらに、第 2 時の生徒の記述から、作品に対する自分なりの特徴や魅力について見出すことができていることが分かる。

以上のことから、2時間の学習を通して新たな発見を得て作品に対する理解を深め、それを自覚することができたと考える。

4 事前アンケート及び事後アンケートの結果について

（1）事前アンケートの結果について

筆者は、令和 4 年 5 月に、A 中学校第 1 学年 B 学級 27 名の生徒を対象に質問紙調査を実施した。本調査は、授業実践前の生徒の「音楽」や「鑑賞」に対する意識や、これまで生徒がどのような音楽的な活動を体験してきたかについて把握することを目的とした。質問内容は以下の通りで、回答法は、5 件法と自由記述とした。

質問①「音楽」の授業について、自分の気持ちに一番当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
 （5：とても関心がある/4：関心がある/3：どちらでもない/2：あまり関心がない/1：まったく関心がない）
 質問②「鑑賞」の授業について、自分の気持ちに一番当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
 （5：とても進んで参加したい/4：進んで参加したい/3：どちらでもない/2：あまり参加したくない/1：まったく参加したくない）
 質問③あなたがこれまでの「音楽の授業」で「楽しかった活動」や「印象に残っている活動」について、自由に書いてください。

次頁の表 11 は、事前アンケート質問②の回答結果である。「鑑賞」の授業に対して「とても進んで参加したい」又は「進んで参加したい」を選んだ生徒は約 7 割であった。選択した理由と併せて考えると、「鑑賞」の授業への参加に対して前向きな意識を持っている生徒が多いことが分かる。

一方で、「眠くなる」「得意ではない」等、消極的な生徒も約 3 割見られることから、「鑑賞」の授業に対する苦手意識を緩和させ、生徒の興味・関心を引き出す働きかけを講

じる必要性が認められた。

表 11 事前アンケート質問②についての学級全体の回答結果

段階	人数 (人)	回答割合 (%)	選択した理由 (自由記述・抜粋)	
			+	-
5	10	37.0	聴くことが好き、楽しい/もっと知りたい 気持ちがいい/胸に響くのが好き	
4	9	33.3	聴くことが好き、楽しい/もっと知りたい みんなで協力できる	
3	7	25.9	参加したくないわけでも参加したいわけでもない/黙っていると頭に内容が入って来ない 見るのは好きだけど聴くと眠い/あまり好きでない/何を理由にやっているのか分からない	
2	1	3.7		あまり得意でない
1	0	0.0		

(2) 事後アンケートの結果について

筆者は、令和4年12月に、A中学校第1学年B学級27名の生徒を対象に質問紙調査を実施した。本調査は、事前アンケートで明らかになった「鑑賞」の授業に対する生徒の意識の変容を捉えることや、本実践研究を通して生徒らが各活動をどのように感じているかについて把握することを目的とした。質問内容は以下の通りで、回答法は、事前アンケート同様、5件法と自由記述とした。

質問①「鑑賞」の授業について、自分の気持ちに一番当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
(5:とても関心がある/4:関心がある/3:どちらでもない/2:あまり関心がない/1:まったく関心がない)
質問②これまでの「鑑賞」の授業を振り返って、自分の気持ちに一番当てはまる番号を選び、○で囲んでください。
(5:とても進んで参加できた/4:進んで参加できた/3:どちらでもない/2:あまり進んで参加できなかった/1:進んで参加できなかった)
質問③あなたが「鑑賞の授業」を受けて「楽しかった活動」について自由に書いてください。
質問④あなたが「鑑賞の授業」を受けて「難しかった活動」について自由に書いてください。

表 12 事後アンケート質問②についての学級全体の回答結果

段階	人数 (人)	回答割合 (%)	選択した理由 (自由記述・抜粋)	
			+	-
5	14	51.9	次の授業が気になる/楽しい(聴くこと) 知っている曲だ/わかりやすい曲だ 楽譜の工夫を知った/特徴を見つけられた いろんなことをまとめられた	発表はできなかった
4	12	44.4	楽しい/良い経験/自分の気持ちを発表できた 曲や楽器を深く知った/好きな曲/興味がわいた	もう少しできた/発表はあまりできなかった
3	1	3.7		まずまず
2	0	0.0		
1	0	0.0		

表12は、事後アンケート質問②の学級全体の回答結果である。この表から「とても進んで参加できた」又は「進んで参加できた」を選択した生徒は9割を超えたことが分かる。また、これを事前の質問②の回答結果(表11)と比較すると、約2割の増加となった。この要因としては、生徒が選択した理由と併せて考えると、「鑑賞」の授業への参加意欲が増したり、授業の楽しさを見出したりしたこと、次の授業への期待感を持てたこと等が挙げられる。

また、この質問②について、個々の生徒の回答結果を比較すると、事前には「何でやっているかわからない」と音楽の授業に対しての意義を見出せず「どちらでもない」を選択した生徒が、事後には「興味がわいた」という理由から「進んで参加できた」を選択している。

このように、事前アンケートの段階では、「鑑賞」の授業に対する具体的なイメージを持つことができなかったと思われる生徒にも、「鑑賞」の3つの単元の実践を通して、自分なりに興味・関心を見つけ授業に参加しようという意欲の喚起が認められた。

ただ、質問の用語として用いた「参加」を「発表すること」と限定的に捉えている生徒がいる可能性があるため、今後同様のアンケートを実施する際には注意したい。

次頁の表13は、事後アンケート質問③及び④について、生徒の回答の一部を抜粋したものである。「楽しかった活動」については、初めての経験だったという理由で「楽器に触れたこと」「楽器を演奏できたこと」が多く挙げられた。

一方で、「難しかった活動」についても「ヴァイオリンの演奏」を挙げる生徒が見られ

た。その理由として「弾き方が難しい」ということを挙げていた。なお、「(弾くのは難しかった)でも楽しい」という前向きな記述も見られた。

以上のことから、生徒が実際に楽器を見たり、楽器に触れたりする活動は、多くの生徒の音楽の授業への積極的参加を促すのに有効であると考ええる。

表 13 事後アンケート質問③及び質問④についての回答結果(抜粋)

	楽しかった活動	難しかった活動
活動	・楽器に触れた(演奏できた)こと ・魔王	・ヴァイオリンの演奏 ・曲の特徴をまとめる活動
理由	・初めてだったから ・登場人物のやりとりがおもしろい	・弾き方が難しかったから ・どんな感じか、曲の印象がわかりづらい曲も一部あったから

5 成果と課題

現時点での成果として、

- ・情報の与え方を工夫したり、実際に楽器に触れたり演奏できる活動を取り入れたりしたこと等で、生徒は作品等に対する興味・関心を持続させながら授業に取り組むことができた。
- ・教師が生徒の多様な「聴く姿」等に注目したことで、言葉や文字だけでは分からない生徒の気付きの様子を捉え、生徒の考えやイメージ等を引き出すことができた。
- ・学習を振り返る場面を設定したことで、生徒は作品に対する気付き等を自覚し、理解を深めることができた。
- ・教育機器を活用したことで、生徒は作品に対する特徴を捉えることができた。
- ・生徒がこれまでの知識を活用できる場面を設定したことで、生徒は互いに理解を深めながら学習することができた。

が挙げられる。

また、今後の課題として、

- ・本実践では、生徒が知覚・感受したことを「言葉」や「文字」以外の表現方法から生徒の学びの姿を捉えようとしたが、十分に生徒の表現を引き出すことができなかったため、さらなる工夫や手立てを講じること。
- ・楽譜を用いた活動場面では、生徒の読譜に対する苦手意識を緩和させることが十分できなかったため、読譜に対する抵抗感を軽減できる工夫や手立てを講じること。
- ・研究主題に迫るために様々な「指導の工夫」を考え、実践したが、その効果について客観的に検証することが十分にはできなかったため、これを改善する手法について検討すること。

が挙げられる。

本研究では、生徒の多様な「聴く姿」に注目することを中心に、「鑑賞」における主体的な授業づくりに取り組んだ。

今後は、本研究で得られた成果と課題を踏まえ、さらに個々の生徒の学びの様子を捉えるための視点を磨き、生徒が主体的に参加できる授業を目指して引き続き精進していきたい。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会 答申(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- 2) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 音楽編」
- 3) 濱本飛鳥(2018)「中学校音楽科における『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善についての研究——鑑賞領域における題材開発を通して——」『広島県立教育センター 平成30年度研究報告』
- 4) 山田陽一(2017)『響きあう身体 音楽・グルーブ・憑依』春秋社